

災害とコンパニオンアニマルの社会学

——批判的实在論の災害研究への応用——

立教大学社会福祉研究所 梶原はづき

【1. 目的】

本発表では、発表者が2018年3月に博士号を取得した博士論文の概要を報告する。1990年代以降、欧米では、人と動物の関係性を研究する Human-Animal Studies (HAS) という学際的な領域が発展し、社会学のサブフィールドとして確立されつつある。一方日本では、人と動物の関係性を社会的に考察する研究は非常に少ない。本論文の目的は「現代日本社会における人と動物の関係性の特性は何か、そしてそれは社会にどのように影響しているか」という問いに取り組み、人と動物の関係性に対する理解を深め、ひいては日本における「人と動物の関係性の社会学」の領域の確立に寄与することである。本論文では、東日本大震災の人とコンパニオンアニマルに焦点をあて、災害の場で立ち現れる関係性から、平時の日常に埋め込まれた人と動物の関係性の構造を逆照射する形で明らかにした。また事象を生起させている深部の構造を分析するための論理的アプローチとして、批判的实在論を導入した。

【2. 方法】

飼い主、動物ボランティアなど関係者計65名へのインタビュー、補足的な74名へのアンケート調査のデータから、津波災害と原子力災害で避難した飼い主が、コンパニオンアニマルとの関係性をどのように語っているか、そしてその関係性の表出として、災害時にどのように行動したのかを記述し分析していった。また本論文では、理論的アプローチとして、イギリスの哲学者 Roy Bhaskar (1944?2014) が提唱した社会科学論である批判的实在論 (Critical Realism) を選択した。

【3. 結果】

災害だからそこ見えてくる飼い主とコンパニオンアニマルの関係性を探求し、両地域の関係性の差異と、飼い主の経験において共通する問題は何かを考察した。結果として、災害のほとんどの場面で、コンパニオンアニマルの生命の価値の矮小化が無意識に行われ、また一方では動物救助に集中する活動家による動物の命の崇高化が行われ、飼い主とコンパニオンアニマルの関係性は重視されなかったことを明らかにした。その因果メカニズムは、「動物愛護」という曖昧で情緒的な概念でコンパニオンアニマルを捉え、商品としてのコンパニオンアニマルと人の関係性以外想像し得ない社会構造にあることを指摘した。

【4. 結論】

災害時に人と動物の関係性が無視されるような事態が繰り返されないためには、現実社会の中で人と動物が結んでいる関係性そのものに意味を見出し、あらためて位置付ける必要がある。本論文で明らかにしたような、人とコンパニオンアニマルとの強い結びつきを、「新しい権利」として提示することは、その第1歩となるはずである。そこで、その権利を、“Bonding Rights” (結びつきの権利) と名付けることを提案し、実践への適用へ向けての議論の端緒とした。今後はこの“Bonding Rights” (結びつきの権利) の輪郭と範囲を明確化するよう努め、一般社会に受け入れられる概念になるよう、精緻化の努力を続けていく。